《修士論文要旨》

『稲生物怪録』研究

大田将史*

『稲生物怪録』は、江戸時代中期から末期にかけて広まった妖怪譚である。江戸時代中期の寛延二年（一七四九）、広島県三次市において、稲生武太夫（幼名平太郎）が住む屋敷に一カ月もの間、毎日様々な妖怪たちに遭遇する。しかし稲生武太夫は様々な妖怪の出現にも臆することなく怪異に耐え抜き、ついには妖怪の首領である山ン本五郎左衛門が現れて、降参し退散していく。この物語の特徴は、実際に起こった出来事として伝えられている。物語に登場する場所や人物は、当時の記録にも残っており、現在にも実在する名所や寺社、伝承されている事物が存在している。

江戸時代において、『稲生物怪録』の刊本は現在発見されておらず、多くが絵巻や写本によって広まったと考えられている。また、『稲生物怪録』には幾つかの物語系統がある。それによって諸本間で物語の細かな差異や異同が見られる。

本論文では、『稲生物怪録』を成立順に並べた時に、その差異や異同から『稲生物怪録』が物語をどのような方向性で完成させようとしたか、その構造的解釈・分析を試みる。本論文では主に稲生武太夫が成立・制作に関わったとされる文献や、風聞として採取された記述を基に、考察を進めるものとする。

本稿は主として、第一章・第二章・第三章・第四章の四つの構成をとっている。

第一章では、物語概要・物語成立過程・研究史・考察に使用する主な資料を紹介している。物語は江戸中期から江戸末期にかけて、写本や絵本、絵巻などによって流布することとなる。そして国学者平田篤胤の研究の一環として、諸本を統合させて完成したものが『稲生物怪録』となり、現在の稲生武太夫が遭遇した妖怪騒動の総称を『稲生物怪録』と呼称している。また『稲生物怪録』研究は比較的近年になってから注目されている。現在は諸本の発掘や翻刻、藩の間での流布関係など、未だ多くの事柄で研究がなされている物語である。

第二章では、百物語と『稲生物怪録』の関係性について考察している。『稲生物怪録』の物語の中で、百物語が執り行われる場面がある。

平成24年度　*文学研究科国文学専攻

『稲生物怪録』を考えるとき、研究者の間で、百物語が原因で怪異や妖怪は出現することとなってしまう、と言及されている。しかし、『稲生物怪録』諸本を成立順に並べて考えた時、本当に百物語が原因で妖怪が出現してかという疑問を持った。そこで第一章に取りあげた考察文献から百物語に関する記述について明確に表す。そして百物語というものがどういった性質をもつものであり、また江戸時代における百物語の性質について精査する。そして江戸時代における百物語の性質と、『稲生物怪録』考察文献の物語における、百物語の展開と構造を比較した時に、『稲生物怪録』の変化と江戸時代の百物語の性質がどのように重なり合うか。また重なり合う構造をしているならば、どのようなことが言及できるか、考察している。考察の結果、『稲生物怪録』諸本成立の時代が下るにつれて、物語における百物語は形骸化していき、付加的な要素として取り入れられていったと考える。

第三章では、怪異構造について考察している。『稲生物怪録』では諸本によって発生する怪異や、登場する妖怪に異同が見られる。その中で、柏正甫系諸本以降に成立する系統本・絵巻では、第一日目に発生・出現する怪異や妖怪についての構造が比較的同じように展開されている。そこで考察文献以外にも、柏正甫系諸本以降の絵本・絵巻などを取りあげて、第一日目に起こった出来事についての構図と展開をみてみる。そして江戸時代における妖怪文化や妖怪・怪談本などを参考に、第一日目の怪異構造について分析していく。着目したのは柏正甫系諸本の成立以降、第一日目の怪異の構造はどの諸本でもほぼ同じであることや、空間を用いた怪異構造である。そこで同じように、空間を用いた怪異構造をもつ『天月物語』・『御存じの化物』などの怪異構造などを比較する。

第四章では、妖怪の首領である山ン本五郎左衛門の記述について着目する。『稲生物怪録』に関連する文献には必ず、妖怪出現最終日に高位の妖怪、或いは妖怪の首領と称する妖怪が登場する。そこで、成立順に妖怪首領の性質の変化を考え、絵本系諸本以降、容姿が与えられたことについて、江戸における妖怪文化の影響なども含めて、構造的解釈を考察する。

結論として、妖怪首領の容姿は江戸の妖怪文化に影響を受けた可能性が十分にある。また、妖怪首領と武太夫の勝負は、精神的な立場では武太夫の勝利といえるが、妖怪領主の容姿からは異界に対する考えが現れており、武力で討伐ができない存在として描かれている。